



第12回作文コンクール

心のふれあい 大賞

わたしのまわりの医療体験

主催 公益社団法人 福岡県医師会

共催 福岡県、福岡県教育委員会

後援 九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会
北九州市教育委員会、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、西日本新聞社(順不同)

目次

主催者あいさつ

表彰式の様子

入賞作品紹介

一般の部 最優秀賞

仲谷 冴子 さん

4

一般の部 優秀賞

柳田 美穂 さん

6

一般の部 優秀賞

日高 舞 さん

8

一般の部 優秀賞

阿部 光洋 さん

10

中高生の部 最優秀賞

岡 美緒 さん

12

中高生の部 優秀賞

岡田 隆汰 さん

14

中高生の部 優秀賞

西村 陽斗 さん

16

中高生の部 優秀賞

白井 瑛美理 さん

18

中高生の部 優秀賞

黒田 呂瑚 さん

20

小学生の部 最優秀賞

柳田 優妃 さん

22

小学生の部 優秀賞

本田 千紘 さん

24

小学生の部 優秀賞

倉元 杏結実 さん

26

小学生の部 優秀賞

内村 柔心子 さん

28

選考委員

29

募集要項

30

主催者あいさつ



公益社団法人 福岡県医師会

会長 蓮澤 浩明

医療は、患者さんと医療従事者との信頼関係によってはじめて成り立つものです。

県民の皆さまが安心して医療を受けるために大切なことは、医療現場で交わされる言葉や相手を想う気持ちであり、その一つひとつが大きな信頼となって、地域の医療を育んでいくと思います。

福岡県医師会は毎年、医療の原点である「信頼関係」にスポットをあて、体験記を募集する作文コンクール「心のふれあい大賞——わたしのまわりの医療体験」を開催しています。十二回目となる今回も、小学生から一般の方まで合計一七二点ものご応募をいただき、一般の部・中学生の部・小学生の部の各部門から、最優秀賞および優秀賞あわせて十三名の方を表彰いたしました。

寄せられた作品からは、いずれも皆さまの生活の中で医療が身近で欠かせないものであり、互いを思いやる気持ちで医療を支えていることをあらためて感じることで、大きな力をいただくことが出来ました。

皆さまから寄せられた実際の体験に基づく貴重な声を受け止めながら、福岡県医師会は今後もより良い医療の実現に向けて全力で取り組んでまいります。

本作品集が多くの皆さまの手に届き、医療への理解と関心が一層深まり、県民の皆さまと医療従事者とのつながりがさらに強いものとなることを心より願っております。

結びに、今回受賞された皆さまに心よりお祝いを申し上げますとともに、ご応募いただきました方々、またご支援賜りました方々に厚く御礼申し上げます。



入賞作品

一般の部

最優秀賞



直方市
仲谷 冴子

「二日一日を大切に」

病院の天井を見上げながら、私は静かに息を整えていた。多発性骨髄腫と診断された。四十七歳。まだ子供の成長を見届けない年齢。高校入学したばかりの双子の娘たち、中学に入学したばかりの息子。三人とも進学して間もないころだった。三人の未来を思うと、

涙がこぼれそうになった。

私は、子育てに、家事に、仕事にとにかく忙しかった。二か月前から肋骨が痛く、整形外科でレントゲンを撮ってもらったが異常なし。貧血も酷く産婦人科にも通っていたが改善されなかった。

「すぐに病院に戻ってきてください。」仕事の途中に抜け出して、予約していた職場近くの病院を受診。様々な検査を終えて職場に戻ろうとしていたところ、携帯電話がなった。病院に戻ると、医者から、血液検査の結果が悪く、すぐに入院してほしいと告げられた。「ガン」

職場のみんなに負担をかけることになるな…という申し訳なさ。三人の子供たちの世話はどうするか。七十半ばの両親に頼まなくちゃいけない。その前に報告か…。ショックだろうな。親孝行どころか…申し訳ない。入院準備をしなくては。外出許可はたった二時

間。悲しい、なんて思う余裕もなく、その間、目まぐるしく動いた。

やっと病室に着き、ふと横になった私はとても冷静だった。ただ、動く度に肋骨や背骨が痛む。三時間おきにトイレに行きたくなる。でも、何もしなくてもいい。動かなくてもご飯が運ばれてくる。片付けもしなくていい。看護師さんが全てしてくれる。何て楽なんだと思った。そして、一気に力が抜けた。

この病院で出会ったのは、看護師Aさん。偶然にも職場のちょっとした知り合いだった。「がんばってください。実は、私も…息子を産んだ後、重い病気が発覚し、命の危機があり、長い間、闘病しました…。」

と話してくれた。まさかそんな経験をしていたとは。Aさんの長い入院生活で、抗がん剤治療のときは、趣味を楽しむようにした話は、とても参考になった。編み物をしたこと、通信によ

る資格をとったことを聞くと、「私は何をしようかな。英会話の勉強してみたいな。読書がたくさんできるかな。」なんて想像することができ、前向きになった。子供が支えになったことや、様々な人に甘えていいことも教えてもらった。

一週間ほどして、大きな病院へと転院が決まった。どうやら移動も危ないらしく、まさかの主治医付きで、救急車に乗っての転院。自分の命が危険なことを感じた。

次の病院で、本格的な治療が始まった。電話やオンラインで子供たちと話すことが楽しみだった。思春期まっさかりの子供たちは、すぐに電話を切ろうとするのがちよつぱり悲しいところ。ここでの主治医は、私より若い女性の先生。小学生になったばかりの娘と入学前の娘がいる子育て真っ最中の先生だった。難しい医療現場で働く先生、敬意も払うし、何だか応援したくなる。

先生から時々、子育てで格闘した話を聞いた。私も、反抗期の娘の話をした。お互いに愚痴をこぼしつつ、いつも笑い話になる。

命を救うお医者さん。私一人の治療方針には、多くの先生方が話し合って決めていることも知った。先行研究を読み込んだり、薬の選択をしたり、私の症状を分析したり、高度な知能と技術が必要である。同じ病でも人によって違う。改めて命を預かる医療従事者の凄さを思い知る。そして、その先生にも家庭がある。仕事と家庭と上手く両立して辞めないでほしいと心の底から願う。

初めての病院でも、次の病院でも、看護師さんたちの優しさには感動した。私は、トイレは二、三時間おきに行きなくなつた。背骨や肋骨が痛く、体勢を変えるのに時間がかかる。立ち上がるのも一苦勞。そのため、トイレに行くのも危ないから、ナースコールで呼

んでくださいと言われる。私以外にもナースコールを呼ぶと嫌な顔一つせずに来てくれる。痛みを訴えたとすぐに来てくれる。「ちよつとわがままなんじゃないかなあ」なんて思うおばあさんの話にもいつも真摯に向き合っていてあげている。尊敬しかない。毎日、朝、昼、夜と検温、血圧測定、点滴の付け替え、「体調はどうですか？」と聞いてくれる。休む間もなく、患者と向き合っていることがわかる。しかも、笑顔を絶やさず、言葉かけが優しい。看護師の偉大さを知る。

現在私は、治療を終え、元気になった。まさか、半年で復職できるなんて思ってもみなかった。家族と過ごせる喜び、働けることの喜びを味わっている。これまでと世界の見え方が変わった。看護師さんのように、優しくありたいと思うようになった。再発の可能性もあるが、一日一日を大切に過ごしたい。



入賞作品

一般の部

優秀賞



北九州市
柳田 美穂

「これからも」

私には、十一歳の娘と、八才の息子がいる。共に、難病である。娘が生後二ヶ月で入院した時から全ては始まった。気管支炎で入院したのに、肝機能異常を指摘され、退院後も何度も検査をしたが、分らずで、ちがう病院を

紹介された。そこでも一年以上分らないままで、大学病院へ転院した。二、三ヶ月に一度採血をしていたが、注射が嫌で泣きさげ、毎回汗と涙で戻ってくる娘を見て、心がしめつけられる気持ちでいた。何もしてあげられない自分がなさけなくて、申し訳なくてつらかった。

弟が産まれてからも、娘の病気は、分らないままだった。息子もどこか悪いんじゃないかと、不安な日々をすごした。五ヶ月から身長、体重の増加不良を指摘され、そこからは入院などをし、たくさん検査をうけてきた。息子二才の頃、難病だという事が分かった。その後遺伝子検査をし、娘も同じ病気だという事が分かった。子供が病気である事さえも、受けとめるだけで精一杯だったのに、難病で、子ども二人共だなんて、その時の私は、受けとめる事さえもできていなかったん

じゃないかと思う。聞いた事もない病気で、先生に、何を質問していいのかわからないくらい、パンクしそうだった。涙がどんどんあふれてきて、目の前の先生が見れなかったのを今でも覚えている。言葉に詰まって、声が出ない私に、先生は優しく寄りそってくださった。すごく言葉を選んで話してくださっているんだと伝わってきた。それまでも、そこからも、今も先生はいつも、私にも子供たちにも寄りそってくれる。私がいっぱいいたいになっていく時、「お母さん、大丈夫ですか」といつも声をかけてくれる。決って強引に話を聞く事はなく、いつも私の気持ちを引きだしてくれる。そしてそっと背中を押してくれる存在だ。すごく感謝していて、同時に、頼りにしている。身内や、友人には吐けない弱音も、先生には話せる。先生がいたから、いるから、私は今もがんば

れているんだと思う。

主治医だけではなく、私や子供たちは、多くの医療従事者の方々に支えられてきた。外来での看護師さんたちには、注射嫌いな子供たちを、いつもはげましてくれて、注射の後のテープも子供たちの好きなキャラクターを用意してくださり、子供たちの成長と一緒に喜んでくださり、それが私にとって、すごくうれしい事で、本当に感謝している。入院をよくする子供たちなので、病棟の看護師さんたちにもすごく感謝している。子供がまだ赤ちゃんの頃、検査続きで機嫌が悪く、シャワーもあびれなかった時、「お母さん、見とくから、おふろ行ってきたら大丈夫よ」と声をかけてくださり、急いでお風呂をませて戻ってきたら、ナースステーションで、にこにこで看護師さんだっこされていた息子を見て入院の疲れもあったのか、涙が出てきたのを今

でも覚えている。看護師さんの優しさが、すごく嬉しかった。息子が40度ごえの熱が続き、一ヶ月入院した時、何もしてあげられない無力感と、家にいる娘の心配で、毎日かかってくる電話で、ママに会いたいと泣く娘、すぐにつらかった。娘もがんばっている。息子もずっと高熱でうなされていて、だっこひもでようやく寝てくれた時、涙がどんどんあふれてきた。こおりまくらをもつてきてくれた看護師さんが、私に気づいて優しく背中をさすってくれた。その後いつもはげましてくれていた看護師さんたちも、夜中なのに来てくれて、「今時間大丈夫だから」と、きつと忙しかっただろうに、私の話をきいてくれておもしろい話をしてくれたりして、笑わせてくれた。今でもその時の事は覚えている。

今は違う病院に行った先生や、大学病院のいろんな科の先生や技師さん、

療育センターの先生方、近所の小児科の方たち、他にもいつもお世話になっている方たちに、私も子供たちも支えられて今がある。つらい時、苦しい時、いつも寄りそい支えてくださり、すごく感謝の気持ちでいっぱいだ。きっと、これからも、色んな事がおき、つらくなる事もかべにぶち当たる事もあると思う。その時は皆さんのあたたかいはげましの言葉や、今までの事を思い出して、私は一人じゃない。大丈夫と、また、がんばろうと思う。そう思わせてくれた医療従事者の方たちに感謝の気持ちでいっぱいだ。



入賞作品

一般の部

優秀賞

遠賀郡
日高 舞

「いっしょに、

頑張りましょう。」

父が中毒性表皮壊死症
になったあの日から

「お父さんの様子がおかしい、返事をしないの、すぐに来て。」

スマホから聞こえる母の震えた声で私はベッドから飛び起きた。八十三才の

父は病院で処方された薬を服用後に不調を訴え、前日に薬疹の可能性があると診断されていた。スマホの通話終了のボタンを押す人差し指が、画面の上でカチカチと音を立て、自分の手が震えていることに気が付いた。次の瞬間、鼓動が体中を駆け巡り、頭の深い場所ですく「ドクッ、ドクッ」と大きな音が飛び跳ねた。

「父さんごめん、ごめんね。」

私は車に飛び乗り、実家までの道のりを父に謝り続けた。昨日の自分を責めずにはいられなかったのだ。

「入院しなくても大丈夫でしょう。」

望んでいた医師の言葉に安堵した私は、帰宅後も不調を訴え続ける父に、

「大人しく寝ていれば治るから……」

と耳を貸さなかった。

朝陽が差し込む部屋で、父は布団に横たわっていた。囲碁や社交ダンスを楽しむ明るい父は、そこに居なかった。人はこんなにも短時間で死に近づく弱

いものだと思いき付けられているようで、目の前の光が闇に変わるようだった。

後悔と不安で私はひどい顔をしていたのだろう。搬送準備を終えたはずの救急車から、一人の隊員が心配そうに降りて来た。

「大丈夫ですか。車の運転はできますか。今からお父さんを病院へ搬送します。運転に注意して病院へ向かってくださいね。」

若い隊員の優しい口調が息子と重なり、私は我に返った。遠くなる救急車のサイレンを背中であきながら、父が居なくなった家へ続く階段を私は駆け上がった。

S 大学病院へ搬送された父は、重症薬疹と敗血症により危篤状態となっていた。朦朧とする意識の中で、

「薬……飲んだ……だけ……」

父の絞り出すような言葉が聞き取れたとき、医療に対する私の信頼は揺らぎ始めた。医師から治療に対する同意を

求められた私は、沸々と体の中から湧き上がるものを抑えた。これから行う治療にも、薬の副作用や更なる薬疹の可能性を否定できないという医師の言葉に体が震えた。

「父は病院から処方された薬を飲んでこの状態ですよ。何を信じて治療に同意したらいいのか教えてください。」

コントロールできなくなった感情や不安を医師にぶつけた。「私の決断が大切な父の命を終わらせてしまうかもしれない」その恐怖と重圧は、医師が発する言葉の一つ一つに対して私の思考をストップさせた。それは目の前で忙しく動き回る医師や看護師を、突然、遠くから眺めているような感覚にさせた。その時、医師が口を開いた。

「私たちは命を救うためにここに居ます。時間がありません。今、この瞬間もお父さんは生きたいと戦っています。救える命を私たちは諦めません。信じてもえませんか。」

私を囲む医師や看護師、その場にいた全員が私を見つめていた。

「私も諦めたくありません。」

医師の言葉に私は迷いを断ち切り、覚悟を決めるしかなかった。

中毒性表皮壊死症と診断された父は一命を取り留めた。医師の言葉は言霊となり、父の命を救いあげてくれた。

主治医のN先生は、私の治療に対する疑問や不安にひとつひとつ寄り添い、容態や治療方針を毎日、説明してくれた。ときにそれは数時間に及び、多忙な業務の中で時間を捻出することは簡単でなかったと思う。

容態が変わる日々に一喜一憂し、幻覚と激痛を行き交う父の傍で、「この選択は正しかったのだろうか」「この痛みに耐えてまで父は生きたいと願っているのだろうか」と私は自問自答を繰り返した。それでも、父に起きた突然の不運が現実であると突き付けられる集中治療室から一步出れば、私は日

常の生活を過ごせていた。それは、看護師のこの言葉に救われたからだ。

「いっしょに、頑張らしましょう。」

交わす挨拶も、掛けてもらう言葉も、父に関わる全ての人々が私たちを応援してくれているように思えた。瞬間のエネルギーは積み重なり、「大丈夫、きつとよくなる」と気持ちを奮い立たせてくれた。その関わりは、父の傍を離れる時間への安心感に繋がり、私自身の暮らしも守れる感謝へと気持ちを变化させた。

父は住み慣れた家に戻り、「残された人生を感謝して過ごしたい」と口にするまで回復できた。そして私の心が動いたように、医療従事者が「人の人生に関わり、寄り添い、命を支える」素晴らしい職業であることを再認識できた娘が、来春、看護師になる。



入賞作品

一般の部

優秀賞

糸島市
阿部 光洋

「声が出ない母と、 そばにいてくれた 人たち」

母が突然高熱を出し、息が苦しいと訴えたのは冬の寒い日でした。救急車で運ばれた先はI大学病院。診断は「重度の肺炎」で、すでに肺の八割が炎症に侵されていると告げられました。医

師から「命の危険もあります」と言われたとき、頭が真っ白になり、言葉を失いました。

母はすぐに集中治療室に入り、気管に太いチューブを挿入され、人工呼吸器につながれました。無機質な機械音が鳴り響く中、眠ったように横たわる母の姿は、私にとってあまりにも衝撃的で、ただ手を握りながら祈ることしかできませんでした。

数日が過ぎたある日、医師から「お母さまの意識が戻りました」と連絡を受けました。急いで面会に向かうと、母は目を開け、私を見つめていました。涙があふれそうになるのをこらえながら「良かった……」と声をかけると、母は何か言おうと口を動かしました。しかし口にはまだ太いチューブが入っており声は出ません。母は必死に伝えようとするのですが、私は何を言いたいのか理解できませんでした。

私はそばにあったメモ帳とペンを母の手に渡しました。母は震える手で何か文字のようなもの、あるいは絵のようなものを書き始めました。しかし、かすれた線は判読が難しく、私は「ごめんね、わからない」と言うしかありませんでした。それでも母は何度も書き直し、伝えようとしていました。

そのやり取りを見ていた近くの看護師さんが、そっと私たちに寄り添ってきました。そして母の書いた文字を一緒に解説しはじめてくれました。「うーん、これは……声……かな？」と看護師さんがつぶやき、何度も母に確認しながら一緒に考えてくれました。やがて、その文字が「声が出ない」と書かれているのだと分かったのです。

看護師さんはすぐに母に向かって、「大丈夫ですよ。チューブが入っているから声が出ないだけ。心配しなくても、声はまた出るようになりますよ」

と優しく伝えました。その言葉を聞いた母は、ほっとした表情を浮かべ、目に涙をためながら小さくうなずきました。

「怖かったね。でも心配しないでもいいからね。」

そう語りかける看護師さんの声はとても温かく、張り詰めていた母の心をやわらかく包み込んでいたようでした。私はその光景を見て、胸が熱くなり、改めて医療の力というものを感じました。

ICUでの毎日は不安の連続でしたが、この出来事をきっかけに、母は安心を取り戻し、少しずつ回復の方向へ進んでいきました。そしてやがて人工呼吸器が外され、自分の声で「ありがとう」と言ったとき、私は涙が止まりませんでした。その一言は、母の努力と医療スタッフの支え、そして心と心のつながりすべてが込められた言葉に

思えました。

今回の体験を通して、私は「医療」というものの意味を深く考えるようになりました。医療は病気を治すだけでなく、患者と家族の心を支え、希望を与えてくれるものです。母の「声がない」と震える手で書いた文字、そしてそれを一緒に解読してくれた看護師さんの優しいまなざしは、私にとって一生忘れられない出来事となりました。

母のICU入院は確かに辛い体験でした。しかし同時に、医師や看護師さんの暖かさ、人と人との「心のふれあい」の尊さを教えてくれた、大切な時間でもありました。



入賞作品

中高生の部

最優秀賞



福岡市・高校2年
岡 美緒

「来てくれて、 ありがとう」

誰にも見せられない弱さに、私は押し潰されそうだった。人と比べることをやめられなかった。自分にないものを持つている人を見るたびに、自己嫌悪ばかりが積もっていった。「自分は

ダメな人間なんだ」そんな思考がいつの間にか呼吸のように染みついてしまっていた。どんどんエスカレートしていき、気づけば「自分には生きていく価値がない」「はやく死んでしまいたい」そんなことを常に考えるようになっていた。眠れない夜が続き、朝が来るのも怖くなった。学校へ行くことすると、心臓が音を立てて暴れだす。訳も分からず涙が止まらなくなることもあった。

ある日、母が「病院に行ってみようか？」と提案してくれた。正直少しホッとした。でも同時に怖かった。私は自分が弱いせいでこんな状態になっているのであって、病気のせいではないのではないか。病院に行くほどのことなのだろうか。そんなことを思っていた私だったが、初めて心療内科の扉をくぐったときは、ほとんど逃げるような気持ちだった。「私は本当に『患者』

なのだろうか」「私はここに来てよかったのだろうか。」待合室の椅子に座り、そんな自己否定や疑問を頭の中でぐるぐると巡らせていた。診察室に呼ばれ、先生と向き合うと、私は一言も言葉を発せなかった。誰にも見せられなかった自分の弱さを言葉にするなんて、到底怖くてできないと思った。しかし先生は静かに言った。「来てくれて、ありがとう」と。その一言で、涙が出そうになった。感情があふれたわけでも、言葉にできたわけでもない。ただ、自分という存在を肯定されたような気がした。私はここにいてもいいのかもしれないと感じた。

うまく話せなかった。言葉にしようとするだけで喉がつかえるような感じがして、涙だけが溢れた。でも先生は沈黙を責めず、うなずきながら、優しい眼差しでまっすぐに私の目を見てくれていた。それから私は少しずつ話し

はじめた。誰かと比べては、苦しくなっていたこと。そのたびに自分はダメな人間だと思っていたこと。はやく死んでしまいたいと思うようになったこと。聞き終えた先生は言った。

「あなたはあなたのままでいいんだよ」

ありふれた言葉かもしれない。本やSNSを開いたらすぐに見つけられる言葉かもしれない。でもこの時だけは違った。このときだけは、心の奥に深く届いた。先生の真剣でありながらも優しく柔らかい眼差しや声色が、その言葉を特別なものに変えていた。私の心の奥にあった重たい何かが、静かに軽くなっていくのを感じた。あの瞬間を、私は忘れることはないだろう。

その日から、通院を重ねるごとに、自分の気持ちを包み隠さず話せるようになっていった。先生にまた話を聞いてもらえるという安心感。作業療法士

さんの「少し顔色がよくなりましたね」というあたたかさ。受付の人や看護師さんの優しくて柔らかい眼差し。それだけで私は「ここにいてもいい」と思えた。

医療とは何か。それはきっと、ただ病気を治すだけのものではない。寄り添うものでもあると私は思った。私にとって、心療内科の先生たちはただの医療従事者ではなく、安心して頼れる存在だった。信頼できる相手がいることで、心はこんなにも救われるのだと実感した。先生と私のあいだにあったのは、治すための診察や薬だけではなく、人と人としての「信頼関係」だったのだと思う。信頼とは、理屈や説明だけで成立するものではない。表情や向き合う姿勢、言葉の選び方。そうしたひとつひとつの態度や行動のなかに、人と人とのつながりが生まれていくのだと、私は身をもって知った。医療従

事者とは、ただ「治す人」ではなく「ともに在る人」なのだと思う。私のように、言葉にできない苦しみを抱える人に対して、丁寧に、温かく関わろうとするその姿勢が、どれほどの希望を生むか。それに支えられて、私はようやく前に進むことを、自分の意志で選びなおすことができた。

今も私は、完全には戻っていない。

でも、焦らないし、私はこれでいい。

なぜなら私は「他の誰か」ではなく、「私」として生きることを選んだから。今振り返れば、この経験は、私にとって「人を信じる力」「人に支えられる喜び」を教えてくれた宝物だ。これから先、

この経験を糧にして、私も寄り添える人になりたいと思っている。ただ助けるのではなく、「ともにいる」ことの大切さを、次は私が伝えていきたい。

あの日、かけられた「来てくれて、ありがとう」という一言が、私を変えてくれたように。



入賞作品

中高生の部

優秀賞



飯塚市・中学1年
岡田 隆汰

「胸の風車 僕が先生に伝えたい こと」

僕には、小さなころから診てもらっている小さな医院の先生がいる。もう十年以上、風邪をひいたり体調を崩したりしたときに通ってきた。大きな病

院ではないけれど、少し重たいガラスのドアを押して中に入ると、そこには必ず先生が「いる」。その姿を見るだけで、体だけでなく心までふっと軽くなる。病気のときにしか会えないから、感謝の言葉はなかなか伝えられなかった。のどまで出かかっても、恥ずかしさで飲み込んでしまう。だからこの作文で、どうしても伝えたい。

幼稚園のころ、予防接種を受けに行ったときのこと。診察室の前で注射が怖すぎて、足が床に貼りついたように動かなくなった。ついに泣きながら廊下逃げ出した僕を、先生は追いかけてこなかった。ただ少し離れたところから

「今日は無理しなくていいよ。」

と、いつもと同じ声で言ってくれた。その一言で胸の奥につかえていた石が、ころんと落ちた気がした。あの瞬間、先生は注射を打つ人ではなく、僕の心

を受け止めてくれる人なんだと分かった。

小学生になってからも、熱で体が鉛のように重い朝や、咳で眠れなかった夜のあと、母に手を引かれて医院へ向かった。待合室の消毒液の匂い、カルテをめくる音、看護師さんの優しい声。その先で先生が

「どうしたの?。」

と目を合わせるだけで、不安がすっと溶けていった。聴診器で胸の音を聞くとき、先生が小さな風車を取り出して「ふーって吹いてごらん。」

と言った。くるくる回る羽を見ていると、こわばっていた呼吸が自然にゆっくり戻っていった。僕にとって、あれは魔法の風車だ。

新型コロナが流行していた頃のこと、今でも鮮明に覚えている。少し熱が出ただけで家の空気が重くなり、体温計の音に家族が息をのんだ。医院に

行くと、先生も看護師さんも白い防護服で全身を覆い、まるで宇宙飛行士のような中、フェイスシールド越しに先生の声が届いた。

「ごめんね、こんな格好で。」

その声だけはいつもの先生で、胸のあたりの緊張がほどけた。鼻に検査の綿棒を入れるとき

「できるだけ痛くしないからね、ゆっくりいくよ。」

と、本当にゆっくり、細心の注意を払って。覚悟していた痛みは来なくて、くすぐったいくらいであつという間に終わった。検査の前に深く息を吸って吐くと、鼻の違和感が少しやわらぐことも教わった。帰り道、僕がほっとしたこと、母の肩の力もすつと抜けていくのが見えた。安心は人から人へ伝わるのだと知った。

待ち時間が長い日もあった。具合が

悪いときの10分は、普段の30分より長く感じるほど苦しい。けれど気づいたのだ。先生は誰に対しても焦らず耳を傾け、納得できるまで説明していた。そして僕の番になっても同じだった。ならば誰かのための長い10分は、きっと僕のための10分でもあるのだ。待合室を見渡すと、壁に掛けられたテレビもウォーターサーバーも、盲導犬への募金箱さえも、患者の不安を少しずつ引き受けてくれているように見えた。

振り返れば、学校へ普通に行けること、友達と休み時間にくだらないことで笑えること、その当たり前を、先生と看護師さんが陰で支えてくれた。あの一言、あの風車、あの優しい声。小さな出来事の積み重ねが、弱い僕の背中を何度も押してくれた。もし先生がいなかったら、熱が出るたびに不安に押しつぶされ、今の僕はもっと小さく

く縮こまっていたに違いない。小さな医院の中に、僕の大きな支えがある。

だから、ここでやつと言いたい。何度ものどの奥でつかえて消えてしまった「ありがとう」を、今こそ。

先生、本当にありがとうございます。僕も先生のように、人の不安を軽くできる大人になりたい。体の痛みだけでなく、心のこわばりまでやさしくほどき、誰かの胸の風車を回せる人に。まずは明日、元気な日にも小さな「ありがとう」を口にできる自分になる。

いただいた安心に少しでも追いつけるように、一日一日を大切に生きていきたい。あの医院で受け取ったのは、処方箋だけじゃない。痛みと同じ速さで、安心も人から人へと渡っていくのだと知った。あの重たいガラスのドアは、先生に会うたび、内側からそつと解けていく気がした。



入賞作品

中高生の部

優秀賞



福岡市・高校2年
西村 陽斗

「信頼」

僕は中学二年生と高校一年生の時に手術を受けた。生まれつき僕の胸は大きくへこんでいた。父も祖父も同じように胸がへこんでいたので、自分の胸がおかしいと思ったことはなく、むしろ自分のアイデンティティのようなもの

のと思っていた。しかし中学二年生の時、学校の健康診断で初めて病院の受診を勧められた。正直ショックだった。自分の胸が病気だとは思っていなかった。だったので、とても不安で怖かった。休日、近くの整形外科を受診し、先生は、「これは大学病院じゃないと手術できないね。」と、予想外の言葉だった。生涯無縁だと思っていた「大学病院」と「手術」という単語が聞こえ、頭が真っ白になった。泣きそうになりながら紹介状を手に入れて初めて大学病院を受診した。周りには自分より小さな子どもと見守る親がたくさんいた。みんな笑顔だった。自分は泣きそうな程緊張しているのどうして楽しそうに笑っているのか理解できなかった。そう思いつながりながら診察を待ちやっと自分の番が来た。診察室に入り少し震えた声であいさつをする。第一印象は少しクールで物静かな感じの先生だと思った。す

ると先生が「よろしくお願いします。」と言った。日常生活でよく使う言葉よく聞く言葉なのに、その言葉は暖かった。今までお世話になった先生たちから感じなかった何かがあった。診察のなかの先生の話も暖かく、いつの間にか緊張や不安は消えていた。その時、待合室にいた親子がなぜ笑顔なのか分かった気がした。

先生の話では、僕の胸のへこみは重症ではないが、そのへこみが心臓の位置をずらしており、将来体が大きくなった時に圧迫してしまうかもしれない。だから、手術で胸に二本の金属のバーを入れ、歯の矯正のように骨を持ち上げ、二年後にもう一度手術をしてバーを抜く。ということだった。手術をすると思っていなかった、まさか二回するとは思ってもいなかったため驚いたが、先生の話聞いているとすぐに受け入れることができた。その後、

医療ドラマでしか見たことのない機械で検査を受けたり麻酔科の先生と面談をしたりし手術の準備を進めていった。初めて受ける手術の日がどんどん近づいていることが恐怖だったが、反対に「あの先生なら大丈夫だろうな。」とも思っていた。

手術前日、その日から僕は入院した。初めての病棟、四人部屋、ベッド、前日でもともと緊張していたのに初めてのもののばかりでさらに緊張した。最後の診察で「はると君なら大丈夫よ。」と先生は言った。「やっぱり先生はすごいな。」とその時思った。病院の部屋は思っていたより静かで過ごしやすかった。看護師さんも何度も顔を出してお話をしてくれたので緊張も和らいで安心できた。そして迎えた当日、思っていたより心は落ち着いていたが、手術室まで歩く足は震えていた。麻酔がかかるまでは、ずっと震えていたと思

う。分かっていたがやっぱり怖かった。今までに感じたことのない恐怖だった。眠るまでにたくさんの方が声をかけてくれた。もちろん先生もだ。手術台に横になり自分の心臓の鼓動が無機質な電子音になって部屋中に響く。少し頭がぼーっとした状態でその音を聞いていたとき、視界に先生の顔が映った。何と言っていたか分からなかったが震えが収まった気がした。そこからは覚えていないが、母から話を聞いて、手術は夕方に終わりICUに運ばれ二日ほどそこにいたそうだった。その後も痛み止めではほとんどが眠っていたが、その間も毎日先生が様子を見に来てくれていたと聞いた。

それから二週間後僕は無事に退院した。退院の時先生は「よく頑張ったね。」と笑顔で見送ってくれた。

僕はこの体験で医師という職業はただ目の前の患者さんのけがや病気を治

すことに向き合うのではなく、患者さんの心と向き合って信賴関係を作ることが大事なのだと分かった。そして、医療にはその人の心から向き合う心と目の前の人を大切に思う心が大切だと感じた。僕の高校に講演に来てくださった医師が「医療は体も心もマイナスの状態の人をプラスの状態に戻すことだ。」と言った。中学生の時の体験があつたからこの言葉が深く僕の心に残っている。

最後に僕の治療に関わってくださったすべての人、担当だった看護師さん、小児外科の先生、ありがとうございました。



入賞作品

中高生の部

優秀賞

福岡市・高校1年
E・S

「勇気と自信」

私はバドミントんに日々打ち込んでいた。毎日きつい練習を頑張っていた。あるとき、左足の中足骨に違和感があった。地面を踏ん張ろうとすると痛みを感じた。「でも頑張らなきゃきつと気のせいだ。結果を出さなきゃ……。」毎日支えてくれる母には中々

言えなかった。私はそれから一年ずつとその痛みに耐えながら練習を重ねた。いつの間にか私の足のつま先部分はうまく動かなくなっていた。それが小学校六年の秋のことだった。私は勇気を出して母に告げた。レントゲン画像によりフライバーグ病であることがわかった。一部の骨が壊死していた。先生からは治すにはこれから三年運動を全く行わないか手術をするかの二択だと言われた。手術は怖い。でもしないで中学をただ勉強だけの三年間にするのか。それは絶対に嫌だった。運動が大好きな私からしたらそれは地獄だった。私は手術を決心した。大変なのはそこからだった。

私は小学校を卒業し中学生となった。六月二十一日、手術の日。私は度重なる検査や話す相手のいない孤独な病室に疲れを感じており、手術時は緊張すらしなかった。終わって目を覚ます。「気持ち悪い。苦しい。」自然

と涙が出た。それから二日間なんにも食べることが出来なかった。その時に分かった。「怪我や病気で苦しむ人はこんなにも辛いのだ。この辛さ以上に苦しいのだ。」と。その間も母はずっとそばにいてくれた。

それからは寝たきりの生活が続いた。お風呂に入る、トイレに行く、歯磨きをする、たったそれだけのことが私にとって大変な作業になっていた。本当に動くようになるのだろうか。毎日不安だった。手術から二週間後、私はリハビリを開始した。まずは松葉杖の練習。階段を登ったり降りたりを何度も繰り返し返した。リハビリの先生は沢山ほめてくださった。私は頑張ろうと前を向くことができた。いつの間にか難しかったお風呂、トイレ、歯磨きが一人でできるようになっていた。それから一週間後、退院した。久しぶりの学校。私は松葉杖をつく。そんな私を見て沢山の友

達が声をかけてくれた。手伝ってくれた。家族みんなも沢山氣を使つて助けてくれた。

その後、私は近くのリハビリテーションに通う事になった。そこで出会った一人の女性の先生が大きく私を変えてくれたのだと思う。週一回、二十分という短い時間にもかかわらず私のカルテを沢山読み込んで様々なリハビリ方法を考えてくださった。その方はすごくポジティブで私に勇気と自信を与えてくださった。うまく動かなくなつた足も少しずつだが自分の思うように動くようになっていった。三か月後、次は歩く練習。左右差なく歩くのは難しかった。体重をかけるのに難しさを感じたのは初めてだった。「歩くってこんなに難しかったつけ。」諦めずに私は練習を続けた。その一か月後、片足でたてるようになるまで回復し、走り始めた。二か月間走り続けた。

ここで私は大きな決断をする。「駅

伝にでる。」最初はただリハビリの為に走っていたが駅伝を走りきるという新たな目標が見つかった。リハビリの先生はより一層協力してくださるようになった。一か月後、私は駅伝を走り切った。痛くて辛かった日々がまるでうそのようだった。しつかりこの足で走り切ったのだと自分に自信が持てるようになった。

そして私は陸上部の短距離でまた新たなスタートを切った。そんなある日、ずっと見てくださっていたリハビリの先生の異動が決まった。その先生との最後の日、私は勇気をもって

「ありがとうございます。」

と伝えた。先生は、

「よく頑張ったね。自分の好きなことを思いっきりできるようにこれから頑張つてね。あなたならできる。」

といってくれた。嬉しかった。また勇気と自信を与えてくれた。それから、ほかの先生のリハビリも頑張ることが

出来た。

中学二年の八月、私は短距離個人種目で百メートル、またリレーで県大会に出場した。大会を無事に終えて私は初めて自分自身に対して「よく頑張った。」と思えた。

それから数年私は陸上を続け、高い目標をもって今も頑張っている。あの時、私が頑張ったと思えたのは支えてくれた家族やリハビリの先生方、友達、学校の先生、そして手術してくださった担当医の先生のおかげだと今になって思う。沢山の人が支えて下さり、私の為に尽力してくださった。私は将来患者さんに寄り添い、信頼されるスポーツドクターになりたい。私がしてもらったように怪我や病気で悩むアスリートに勇気と自信を与えたい。そのために今は勉強、部活動に全力で打ち込み結果を出すことで支えてくれた方々に恩返ししよう。



入賞作品

中高生の部

優秀賞



北九州市・中学2年
黒田 呂瑚

「だいじょうぶ」の力 妹の入院が教えてくれたこと

くれたこと

この夏、私は「信頼」という言葉の意味を、初めて心で理解した気がします。それは、小学二年生の妹が、人生で初めての入院と手術を経験をしたこ

とから始まりました。

妹は「睡眠時無呼吸症候群」と診断されました。夜中に呼吸が止まりそうになるほど、アデノイドと扁桃腺が大きくなっていて、それが気道をふさいでいたのです。さらに耳の聞こえにも影響が出ており、鼓膜にチューブを入れる必要もあるとのことでした。妹は三つの手術を同時に受けることになりました。

手術の前日、病室で見た妹の姿を、私は今もはっきり覚えています。小さな体をぎゅつと縮こまらせて、母にしがみついて泣いていました。

「目が覚めなかったら?」

「鼓膜に穴をあけすぎて全く聞こえなくなったら?」

医師の説明を聞いた妹は、八歳なりに恐怖を感じていたのでしょう。母が色んな同意書にサインをしている姿を見て、妹の目には、「何か大変なことが

起きる」と映ったのかもしれませんが。

私はただ、妹の手を握って、

「だいじょうぶだよ。」

と言うことしかできませんでした。でもその時の私は、自分の言葉に自信が持てませんでした。何が「だいじょうぶ」なのか、自分でもよく分からなかったのです。

翌朝、手術室に向かう直前の妹は、また泣き出してしまいました。でも、担当の先生が妹の前にしゃがみ、やさしく目を合わせて話しかけました。

「るこちゃん、今日はちょっとこわいかもしれないけど、痛くないからね。目が覚めたらお母さんがいるよ。」

その言葉を聞いた妹は、小さくうなずきました。すぐそばにいた看護師さんが、妹の手をそっと包んで

「終わったらアイス食べようね。」

と、友達のように話しかけてくれました。その時、私は不思議と安心しまし

た。妹が信頼できる大人達に囲まれていることが、何よりの支えになると感じたのです。

手術は無事に終わりました。とはいえ、術後の痛みや不安は続きました。

水を飲み込むのもつらそうで、最初のうちは何も口にできませんでした。でも病室に来てくれた看護師さん達は、いつも笑顔で励ましてくれました。

「少しでも飲めたら、それで大成功。あせらなくていいからね。」

看護師さんの口調はとても優しくかったです。母も毎日泊まり込んで、体をさすったり、水を飲ませたり、励ましていました。父も毎日電話で、「頑張れ。」と応援していました。

そんな日々の中で、少しずつ妹の顔に笑顔が戻ってきました。そして、私の「だいじょうぶだよ」という言葉も、ようやく妹の心に届いているような気がしました。それは、先生や看護師さ

ん、そして母の姿、父の言葉が「本当に信じられる人達がそばにいる」と妹に思わせてくれたからだと思います。

退院の日、妹は私の手を握って言いました。

「こわかったけど、みんながいたからがんばれた、ろこねーね、ありがとう。」

私はその言葉を聞いて、はじめて「だいじょうぶ」という言葉の本当の意味を知りました。それはただの言葉ではなく、誰かの気持ちに寄り添い、そばで支えることによって、はじめて力を持つのだということです。

医療は、手術や薬だけで人を治すものではないのだと思います。人と人との信頼や、心のふれあいがあつてこそ、病氣と向き合う力になるのだと感じました。

妹にとっても、そして私にとっても、この入院生活はただの治療の時間ではなく、「信じられる人達とつながった

日々」だったと思います。

この夏、私は医療の現場で、たくさんの、「やさしさ」と「強さ」を見ました。言葉や態度、まなざし、沈黙の中にある寄り添う気持ち——それこそが、医療の原点であり、命を支える力なのだと思います。

いつか私も、誰かの不安にそっと手を差し伸べて、「だいじょうぶ」と心から伝えられる人になりたい。妹のそばでそう願ったこの夏の体験は、私にとって一生の宝物です。



入賞作品

小学生の部

最優秀賞



北九州市・小学5年
柳田 優妃

「大丈夫のまほうの言葉」

私は赤ちゃんの頃から病院に通っている。今の病院で、大きな病院は三回目だとお母さんにきいた事がある。赤ちゃんのころの事はあまり覚えていないけど、注しやの時、すごく泣いて、

おわった後は、かわいいシールをはっ
てもらった記おくはある。今も注しや
はすごく苦手で、もう五年生なのに、
泣いてしまう。まわりは、私よりも小
さな子たちばかりで、いつも泣きたく
ないって思うんだけどこわくて涙がで
てきてしまう。

昨年、はじめて、骨ずい検査をした。
二つ下の弟は何度もやった事のある検
査だけど、こしに注しやをすると聞い
て、私はすごく不安で、こわくてたま
らなかった。入院の日、ひさしぶりの
入院だったし、骨ずい検査をしないと
いけないって事で、私のむねはドキド
キして、ばく発しそうだった。入院し
てすぐに、点てきの針をさすのが、本
当に本当にいやで、とうとう始まった
と、ぼろぼろと涙がでてきた。先生が
やってきて、「優妃ちゃん、お部屋い
どうしようね」と言った。どんどんこ
わくなってきた、お部屋についた時に

は泣いていた。「このお薬点てきに入
れたらねむくなつて、おきたらもう痛
いのはおわっているよ」と先生が言っ
ているけど、こわくて泣きさげんでし
まった。「はやくして」って、おこら
れるかと思った。だけど先生は、私を
ぎゅつと抱きしめて、「優妃ちゃん大
丈夫だよ優妃ちゃんがおちつくまで、
まつからね」と言ってくれた。他の先
生も、かんごしさんも「大丈夫だよ」
と言ってくれた。外来の時もいつも、
先生は、私がかんばるつてなるまで
待ってくれる。かんごしさんも、手を
にぎってくれる。すごくこわくて、不
安でたまらなくて、にげだしたかった
けれど、「大丈夫、まつからね」の言
葉と、先生と、お母さんの手のあった
かさで、いつもの、かんばるのスィッ
チが入った。それでも、何度か、「まつ
て、まつて」をくり返したが、目がさ
めたら自分のお部屋に戻っていた。少

しして、先生たちが来てくれた。「優妃ちゃん、がんばったね」と、え顔で言ってくれた。「泣いてしまったけど」と私が言うと、「泣いたっていいんだよ。優妃ちゃんが、がんばっているしよこだよ」と言ってくれた。今も、注しやはこわいけど、涙もでちゃうけど、先生やかんごしさんたちの「大丈夫」の言葉と、あったかいマスクの上からでも伝わるえ顔に、私は支えられている。大きくなったら私も、先生のようなお医者さんになって、弟の病気を治したい。病気の子どもたちを、体も心もすくいたい。そして「大丈夫」と優しくはげましてあげたい。そのためにも、これからも注しやをがんばる。

先生、かんごしさんたち、いつもありがとう。私、がんばるね。



入賞作品

小学生の部

優秀賞



福岡市・小学6年
本田 千紘

「ケガをして 気づけたこと」

私が四年生の時、右肩を骨折して手術をすることになりました。急に入院が決まり、学校も休むことになりとても不安でした。

病院の同じ部屋には高校生のお姉さ

んと小さな女の子がいました。

みんな一生懸命に病気を治そうとして
いるんだなと思いがんばろうと思
いました。病室には看護師さんが何度
も様子を見に来てくれました。手術前
には担当の先生がどんな手術をするの
かといねいに説明してくれました。こ
わいと思っていた手術も先生が「大丈
夫だよ。一緒にがんばろうね」とやさ
しく笑顔で言ってくれたのでほっとし
ました。

手術はベッドで目が覚めたら、終
わっていました。お母さんが、「無事
に終わったよ。がんばったね。」とう
れしそうでした。

入院中は右手がギブスで使えないの
で左手でごはんを食べる練習や字を書
く練習をしました。お姉ちゃんも心配
して何度もラインをくれました。入院
中、たくさんの人が私をばげましてく
れました。

退院して初めて学校に行く日はきん
ちようしました。でも、私にきがつい
た先生と友達はどうかに飛び出してき
てくれて、私は左手でみんなとハイ
タッチをしました。机の引き出しを開
けると友達からの手紙が入っていまし
た。私はうれしくて泣きそうになりま
した。右手が使えないので、給食を食
べる時は牛乳を開けてくれてそうじ時
間はぞうきんをしぼってくれ、授業の
ノートも見せてくれました。右手が使
えないことは思ったよりずっと大変で
いつも気にせずしていることが、左手
では時間がかかり難しかったです。

今は良くなって右手が使えるようにな
りました。病院は月に一回行って先
生に診てもらっています。先生も看護
師さんも会うたびに学校のことや今好
きなことなどを聞いてくれて、肩の状
態が良くなっていることを喜んでくれ
ます。私はこのケガをする前は病院は

こわいので好きではありませんでした。
でも入院したことで、病院で働く人達
を知ることができて、病院はこわいと
ころではないと思いました。朝早くか
ら夜遅くまで一日中、病院にはたくさ
んの患者さんがきていました。先生も
看護師さんもみんなとてもいそがしそ
うでしたが、一生懸命働いている姿は
かっこいいと思いました。ケガをした
ことは大変だったけど、たくさんの人
のやさしさに気づくことができました。
私もケガをしている人を助けることが
できるようになりたいです。



入賞作品

小学生の部

優秀賞



福岡市・小学6年
倉元 杏結実

「感謝の気持ちを 伝えたい」

私は去年の夏、二週間カナダへ短期留学へ行きました。そして、去年の夏に、大好きなひいおじいちゃんを亡くしました。その時の医療従事者の方へ感謝の気持ちを伝えたいと思い、一年

越しにこの作文を書くことを決めました。

ひいおじいちゃんに最後に会ったのはカナダに行く三日前。ひいおじいちゃんは、頑張る姿を見ることが大好きな人でした。そしてひいおじいちゃん自身もとても努力家で、医者として長く沢山の人の命を救ってきました。戦時中や戦後の話もよくしてくれ、人の命の大切さやはかなさも教えてくれました。カナダに行く前、頑張ってくださいと背中を押してくれたのが忘れられません。

ひいおじいちゃんを始め、家族の期待に応えようと、私はカナダへ旅立ち、自分なりに精一杯楽しみながら頑張りました。そしていい報告が出来るように、ひいおじいちゃんの大好きなオレオとメープルシロップを買い、帰国しました。喜ぶ顔を想像すると早く会いたい、そんな気持ちで帰ると、そこに

は大好きなひいおじいちゃんの写真がかざられていて、お話をにこにこ聞いてくれるひいおじいちゃんはいませんでした。

ここからはひいおじいちゃんを見送った家族から聞いた話です。ひいおじいちゃんは突然倒れ、その日のうちに亡くなりました。もうあまり長くないと分かっていたお医者様や看護師さんは、家族のためにお別れの時間を作ってくださいました。いつも小さい子供は入れませんが、入れてくれたそうです。家族みんなに囲まれて、手を握られて、ひいおじいちゃんは旅立ちことが出来ました。家族が悲しみの中にいる時、看護師さんが優しく、「素敵なひい様だったんですね。お顔立ちに出ています。」と声掛けてくださったそうです。家族が、生前は医者としてみんなの健康を守っていた、第一線を退いても勉強を

常にしていて、ひ孫のケガの消毒などはひいおじいちゃんの役目だったと話す、一緒に泣いてくださいました。

そして、実は見送る時は白衣を着せたくてとお話すると、快く引き受けて下さり、ひいおじいちゃんは、おそらく人生で一番長くそのかつこうだったであろう、また、一番かっこいい姿であろう白衣を着て見送られました。

この話を聞いたとき、私は最期に会えずともくやしい思いをしましたが、ひいおじいちゃんを家族の希望通りに温かく送ることが出来たと聞いて、ほっとしました。これも、私たち家族によりそって、まるで自分のことのように接してくださったお医者様、看護師さんのおかげです。とても温かい優しさで私たち家族はみんな、いい思い出としてひいおじいちゃんを見送ることが出来、初盆をむかえられました。ありがとうございました。



小学生の部

優秀賞



福岡市・小学3年
内村 柔心子

「私のいりょう
たいけん」

私のおばあちゃんは、去年までは歩
けていたけれど、こしのほねをおつて、
にゅういんちゅうに、りょうあしが動
かなくなりました。

すぐにしゅじゅつをしたけれど、今

でも足は動きません。

びょういんを何回か、かわり、今は
家に帰ってきて、一日二回、ほうもん
かんごしさんがきいているそうです。

夏休みにおばあちゃんの家にあそび
にいった時、ほうもんかんごしさんが
きました。

おおきなバッグをもって、そこから、
ちょうしんきや、いろいろなものが出
てきて、なんでもバッグのようでした。

わたしも同じへやでいっしょにいま
した。

おゆをボトルに入れて、おしりをあ
らったり、体のむきをかえたり、せん
めんきにおゆを入れてきて、あわで手
をあらっていました。

おひるになったら、くるまいすにう
つつて、れいぞうこにじゅんぴされて
いるおひるごはんをほうもんかんごし
さんが温めて、食べるところをみてい
ました。

私はおるすばんで、おばあちゃんと
二人でいたので、ほうもんかんごし
さんはやさしく話しかけてくださいまし
た。

おひるごはんがおわると、はみがき
セットをもってきて、はをみがいても
らっていました。しばらくすると、ベッ
ドにうつつて、ねかせてかえっていか
れました。

おしりに手を入れて、ぺんをとろう
としていたのが、いちばんすごいと思
いました。

おばあちゃんはちよつとだけいたそ
うにしていました。

ほうもんかんごしさんは、すごいと
思いました。

選考委員

福岡県教育委員会

大野 義仁

福岡県医師会副会長

平田 泰彦

西日本新聞社報道センター編集委員

鶴 加寿子

福岡県医師会常任理事

原 祐一

筑紫女学園大学名誉教授

中村 萬里

福岡県医師会理事

西 秀博

福岡県医師会広報委員会委員長

松岡 良衛

福岡県医師会理事

田中 耕太郎

福岡県医師会理事

伊藤 重彦

福岡県医師会理事

永田 直幹



募集要項

【開催趣旨】 医療従事者と患者さん、その家族との「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて病気になった時に感じたことや介護にまつわる経験、医療従事者とのふれあいなど、医療・介護に関する体験記を募集、コンクールを行い、優秀作品を発表することで、県民、また医療関係者の医療に対する意識を高める。

【応募資格】 福岡県内の学校に在籍する児童及び生徒、および一般県民。※医師を除く。

部門	① 一般の部	② 中高生の部	③ 小学生の部
文字数	400字詰め原稿用紙5枚 (2000字) 以内	400字詰め原稿用紙5枚 (2000字) 以内	400字詰め原稿用紙3枚 (1200字) 以内
表彰 (副賞)	最優秀賞 1名 (現金10万円) 優秀賞 若干名 (現金3万円)	最優秀賞 1名 (図書カード5万円分) 優秀賞 若干名 (図書カード2万円分)	最優秀賞 1名 (図書カード3万円分) 優秀賞 若干名 (図書カード1万円分)
募集期間	令和7年7月1日(火)～9月30日(火) 必着		

【応募方法】

- 鉛筆(B、2B)／ボールペン／万年筆／パソコンのうち、いずれかを用いて、濃くはっきりと書く。※パソコンの場合、1ページ400字(20字×20行)。
- 表紙をつけて、部門、題名、氏名(ふりがな)、性別、年齢(生年月日)、〒住所、電話番号(FAXがあればFAX番号も)、職業(または学校名・学年)を明記。
- 封筒の表に「心のふれあい大賞」と記載の上、郵送。
〈作品送付先〉 福岡県医師会総務課 作文コンクール係
〒812-8551 福岡市博多区博多駅南2-9-30 (TEL 092-431-4564)

※応募上の注意

- 自作の未発表作品に限ります。
二重投稿、類似、事実でない創作作品、公の刊行物に掲載された作品、盗作の応募は固くお断りします。
応募作品について盗作等による著作権侵害の争いが生じて、主催者は責任を負いません。
違反が確認された際は、受賞決定後も賞の取り消しとなる可能性があります。
- 応募作品は返却いたしません。
- 入賞作品の著作権、出版権は主催者に帰属します。そのため、主催者、後援者が管理するウェブサイトや、雑誌、テレビ、ラジオ、書籍、教材などに利用されることがあります。
- 応募作品に誤字・脱字と思われる内容が認められた場合には、主催者が修正を加える場合があります。

【入賞発表】 令和7年11月下旬 受賞者に通知、後日福岡県医師会ホームページで公表(予定)
令和8年1月中旬 表彰式を開催(県民のための公開講座と同時開催予定)

【参加賞】 中高生の部および小学生の部に応募された方全員に粗品を進呈。

【主催】 福岡県医師会

【共催】 福岡県、福岡県教育委員会(順不同)

【後援】 九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、
福岡市教育委員会、北九州市教育委員会、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、
毎日新聞社、西日本新聞社(順不同)



令和8年3月発行
公益社団法人福岡県医師会

〒812-8551 福岡県福岡市博多区博多駅南2-9-30
電話：092-431-4564 FAX：092-411-6858

福岡県医師会からお知らせ

役に立つ医療情報を各専門家がお話する「県民健康づくりセミナー」や
定例記者会見の内容など、さまざまな情報を各種SNSなどで発信しています！



公式YouTube
チャンネル



『子どもの口腔機能発達不全症とは』
『救急車 必要なのはどんなとき？』
『A群溶レン菌咽頭炎 警戒続く』
…etc



公式Facebook



公式X(旧Twitter)



＼県民の皆様へ医療に関する様々なお役立ち情報を配信します／

公式 **LINE**
友だち募集中！



お問い合わせ

福岡県医師会総務・経理課 TEL092-431-4564 FAX092-411-6858
E-mail fpma-somu@fukuoka.med.or.jp

ホームページ➡



